

# 小学2年生における漢字書字低成績の誤答特徴に関する研究

—重度低成績児及び要配慮児についての検討—

○中村理美  
(東京学芸大学附属特別支援学校)

中知華穂  
(日本学術振興会)

小池敏英  
(東京学芸大学)

KEY WORDS: 漢字書字低成績 学習障害 誤答分析

(目的)

近年、小学校低学年の学習困難に対する支援の必要性が指摘されている。中ら(2014)は、漢字学習困難に対する支援として、小学2年の段階でリスク要因を早期に評価し、その軽減を図る指導が効果的であることを指摘した。

漢字書字の誤答特徴について、従来の研究(宮内, 2008; 大庭, 2013)では、漢字の誤字のパターンや特徴が示されているものの、低成績児に特化したものは少ない。そこで、本研究では中村ら(2017)における誤答を細分化し、重度低成績児および要配慮児の誤答特徴を検討することを目的とした。

(方法)

東京都の小学校13校に調査を依頼し、アンケートの回収があった7校の通常学級に在籍する小学2年生(435名)を対象とした。保護者への調査研究の同意は、研究趣旨を文書で伝え、小学校を通して行った。調査結果については、個別の情報として学校長および各担任教師に報告を行い、あわせて低成績児童に対する支援方法や教材の情報を提供した。調査漢字は、実施学年の1年前の学年配当漢字から17文字出題した。

本研究では、漢字書字低成績として、無回答の構成度数が隣接区間と比べて顕著に高かった0~5パーセンタイル区間を重度低成績児とした。2年生の書字テストの5パーセンタイル値の得点は、72.2であった。また、アンケートにより教員が「学習上の配慮を行っている」とあげた児童を、要配慮児として評価した。

中村(2017)においては、漢字書字テストの反応タイプを「正答」「無回答」「誤答」に分類した。今回、誤答のパターンを、無回答を含む10パターン(非字、音韻、意味、形態類似、一部再生、1画多、1画少、鏡、その他)に分類し、漢字書字の重度低成績児及び要配慮児の誤答の特徴について検討した。

(結果)

各誤答の誤字の例を表1に示した。435名中、重度低成績児(N=13)、要配慮児(N=22)、であった。要配慮児は、1画多が最も多く、次いで音韻、その他、意味、非字など誤答の種類が広く分散された(図1)。重度低成績児は、一部再生が最も多く、次いで無回答、非字が多いという結果であった(図2)。また、要配慮とされかつ重度低成績であった場合の児童(N=16)についても検討した結果、無回答が36%を占めた(図3)。

表1 誤答の分類と誤答例

分類	誤字例
非字	時 凡 止
音韻	笑 夕 笑 台 <sup>ひと</sup> 人
意味	金 円 町 村 車 汽
形態類似	手 毛 車 東
一部再生	花 金
1画多	耳 手 先
1画少	男 町 子
鏡	田 耳
その他	関連性のない他字 等

(考察)

担任が配慮を判断する場合の要因については、判断の指標が多岐にわたることが示唆された。一方、要配慮と判断され、かつ重度低成績であった場合には無回答が多くなることから、無回答の割合が支援の際の指標に有効であることが指摘できた。今後、3~6年生についても分析し、誤答特徴や発達の变化、その支援について検討する必要があると考える。

(文献)

- 宮内健(2008) 小学生の漢字書字学習における組み立て認知方略の有効性について(2), 教心第50回総会, p560.
- 中知華穂 他(2014) 小学2年生における漢字読字・書字困難のリスク要因に関する研究, 特殊教育学研究, 52, p1-12.
- 中村理美 他(2017) 小学2~6年生における漢字書字低成績の背景要因に関する研究, 特殊教育学研究. (印刷中)
- 大庭重治(2013) 小学生の漢字書字における誤字傾向, 日心第77回大会, p1105.

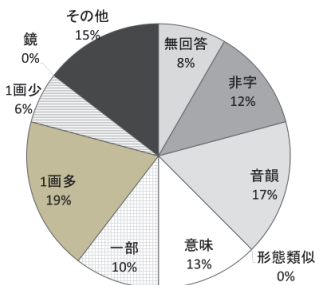


図1 要配慮

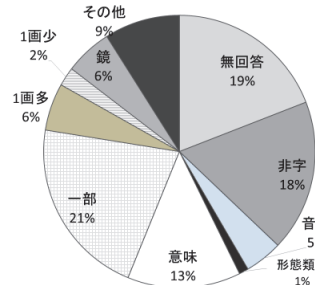


図2 重度低成績

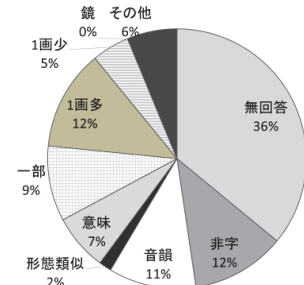


図3 重複